






風土

XIX



	102	103
114		

目次

編集後記	88	茂木光春
ほくは寓話である	73	茂木光春
原市沼周辺の遺跡から	51	濱野弘之
庶民列伝―昭和原人―	31	濱野茂則
プラタモリ伊奈町之版(を、もしも、やったら)	19	細田浩
「Om i y a O f M y M i n d」	5	宮澤新樹

庶民列伝 — 昭和原人 —

浜野茂則

※昭和原人 — 忘れ去られて行く昭和原人 —

これは私が勝手につけた名だが、のうてんきで感覚感情人間で情に厚く状況判断もなしに縁にまかせて行動してしまう人間たち。常に自然と共に生き、人間交流の渦に巻き込まれているような人のような気がする。この人達の生き方の中にも実は平成と次につながる時代を生きるヒントがあるのではないかと思われるのである。



車屋

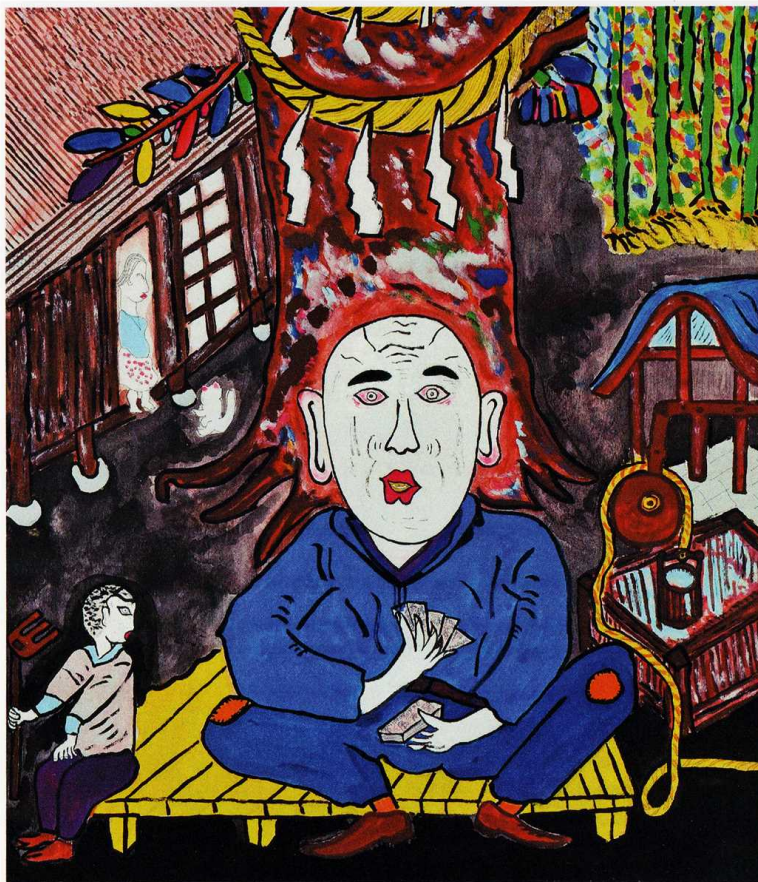
車屋

車屋のオートーは大八車を引いて運搬業をやっていた。アメリカ製のジープとぶつかって、大八車は壊れ、オートーは左腕に重傷を負った。ほとんど左腕は利かなくなった。少々の田畑を耕し、その利かなくなった左腕を大八車の横木に添えてその後も運搬業をつづけた。ひまな時は近所の湊屋の助ッ人をやった。サツマ掘り、稲刈り、脱穀、俵しばり、製茶（茶作り）。そして六人の子供を育てた。車屋の不幸は度重なる事故だった。四男のマーちゃんは六才の時、火の見やぐらの中から落ちて十二針も縫う傷を頭に負った。次男のテーちゃんは二十才の時婚約したうれしさの余り、酒を飲みすぎ、列車のデッキに首を突き出して吐いた時、電柱にぶつかって即死した。五男のフミちゃんは十八才の時、上尾の酒場の女の子をバイクでアパートまで送って行くというので雷と大雨の中、ダンブカーのうしろに突っ込んで死んでしまった。

戦後農地解放で手に入れた土地も生活苦のために早々と売ってしまった。ある時、車屋のオートーは神棚を庭先で燃やしていた。それを見た近所の人は「車屋もとうとう宗教に入ったぞ」とうわさをした。

そのずーと前、田ンボの共同草刈りの時、オートーからすれば孫のような近所の少年農夫に「はあ終りだよ」と言っ

てあんぐりと首を垂れたという。



千三ツツアン

千三ツツアン

千三ツツアンは千言^{チミ}って三ツしか本当のことがないのでそう言われていた。血すじのようで、先代の熊さんもホラ熊さんと言われていた。千三ツツアンは畑仕事は嫌いだ^{キミ}が、選挙と酒が大好きだった。選挙きちがいとも言われていた。何かしら理由をつけてはバイクに乗って吹っ飛んで歩いてきた。だからいつも畑は女房一人で草を追いかけている始末だった。「どーしてどーして、松永、三ツ林もてーしたもんだが、秩父の荒船清十郎にはかなうめー。角栄みてーな大物だね。選挙の時なんか、ピッカピカの革靴はいたまま畑のドロの中どんどんへえって行って「父ーちゃん、頼むでっつんで、首に締めてるネクタイはずしてくれたり、名前入りの万年筆なんかどしどしくれちゃうんだから、てーしたもんだ荒船は。ハア秩父じゃ荒船が立つって言えば、共産党もこりヤダメだって、出ねーってんだからね」そう言^{キミ}って千三ツツアンは目を丸くして短い頭を左手で撫でまわすのだった。千三ツツアンはどうやら政策はどうでもよくて、金まわしがよかつたり、大判ぶるまいや庶民に対する平等感の役者ぶり、人にはできない人侠的^{キミ}なところが好きなようだ。しかし、そうかと思えば松永議員を推してると言^{キミ}って「オラー、今日は浦和、大宮、上尾とあっちこっち五万、十万と金をぶん撒いて来たア」と言^{キミ}う。選挙のためにどこからか預かった金もあれば自分の持ち金の場合もあるらしい。「今はどーってことなくなつたって後で効き目が出て来る金だから」と千三ツツアンは付け加える。時々選挙違反で警察の調べを受けたり留置されることもあつた。それでも千三ツツアンは一向に懲りないのである。土地ころがして大金が懐に入^{キミ}ったとなるとまた金をブン撒いて歩くのだ。「ここん家は気に入ったア」と五万円、上がり^{キミ}がまちに置いて行く。もらえないという^{キミ}と本当に「一旦出した金は下げられねー性分だア」と言^{キミ}ってライターで札に火を付け始める。「それじゃあ」という^{キミ}のもらつてしまうのである。選挙がらみになると危ねえと思^{キミ}いながらもついついもらつてしまうのである。農閑期になると千三ツツアンの活動はますます盛んになる。農家同志しか売買して登記できない土地まで動かすのだ。「山林なら一番世話ねーや、誰

だつて買えら。東京にや金が余つてる金持ちがわんさといふからな。畑や田ンボだつて登記しなきゃ売買はできる」と言い切るのだ。「千三ツツアンのことだから信用できねーぞ」と夫が言えは「んでも東人家でも山林売つてもらつて木小屋建てたり娘、嫁に出したつてじゃねかや」と女房に言われると夫もまたぐらつと来てしまうのだった。自分の家より格下の所で洗濯機買った、テレビ買ったと聞くと、どの家でも動揺するのである。

「どーだい。熊本のチツソの金持ちが埼玉にえれー御殿みてーな家を作るつてんで、おれの出入りしている議員に話が出来て一枚板のケヤキ廊下を作りてーつてんで探してんさ。どーだい。ここん家の大ケヤキ三本全部とは言わねー一本、あの横綱ケヤキだけでいいから譲つてくんない。金にいとめはつけねえ。百万だつて二百万だつて出すつて言つてんだから」と千三ツツアンは切り込んだ。金はないけどケヤキ大尽と言われているトイちゃんは畑から帰つてきて、マンノウを持ちながら「昔つから水神様だからこれだけは伐るなとご先祖から言われているからこの話はなかつたことに」と小声で言う。「トイちゃん、ご先祖大事にするのもいいかげんにしろよ。ここんちはケヤキ大尽と言われているんだ。横綱から関協、小結まで。他にだつて百年ぐれー経つてるケヤキ何本もあらあ。一本ぐれーよかんべ。母アーちゃんはぐえー悪りーつてんで一年以上も寝たり起きたりだんべ。働かせ過ぎたんだよ。先祖守つて母アーちゃん殺すのか。みんな金なんかどこにあんだつて言うような家だつてテレビ買つてら。楽させてやれよ、母アーちゃんに。子供達だつてよろこぶで。横綱一本譲つてくれりや、このボロ家の台所直して水道、洗濯機、テレビ、冷蔵庫だつて買えらあ。こんなじめじめした所に女房子供置いといたやだめだよ」と迫ると、もう陰にいた女房子供たちは父ちゃんがなんと返事するか、息を呑んで見守つた。千三ツツアンは札束をシヤリシヤリと音をたてて数えてドンと板の間に置いた。大ケヤキの横綱は売ることになった。「ご先祖も母ちゃんも大事になあ。いいことしたなあ。売りてー土地でもあつたらまた言つてくんない。この母屋直すぐれーな金はすぐ用意できるからよ」と言つて、千三ツツアンはエンジンをかけてバイクで走り去つた。

それから数年した秋口の米の俵締めをしていた時だった。「ヤラレター！」という声を聞いて女房が木小屋の方に飛んで行くと「頭がブチッと切れやがつたア！」と叫んで畳の部屋に寝かした三時間後に千三ツツアンは息を引き取つた。



シゲハル

シゲハル

シゲハルの家はシカメエと言われていた。氷川神社の前に住んでいたのでそういう屋号がついたのだった。氷川前は一反畝ほどの土地は持っていたが貧しくて冬の寒さをしのぐこともできず、自分のボロ家のハメ板をはがして燃料にするほどだった。とうとうそこにもいられず小貝戸(地区名)の清光寺の境内に住ませてもらっていた。親は子供のことは放りっぱなしだった。子供たちはいつも飢えていた。墓地が遊び場だった。墓に供える食べ物も食ったりしていた。「みせてやろうか」と言って勝手に他の家の墓石の下の骨壺を引き出しては得意になって中のお骨を見せたりした。他の子供たちは親や先生におこられるよと言って逃げ出し、「あいつ、おつかねーよ、何するかわからねーぞ」と言われて埒外の者となってしまうのだ。よその親に「うちの子供がなめてるアメを取られた」と押しこられてもめつたに家に親もいないのでどうにもならない。学校へもほとんで行ってないので先生に言うわけにもいかない。シゲハルはだんだん村から遠退いてこそド口をやったり、ヤクザの下についたりして札付者として白眼視されたのだった。

二十年ほどしてシゲハルはシカメエの近くに姿を現わすようになった。オジさんにあたる常一さんに「オレの土地を返せ」と言い出した。一家離散状態でシゲハルも消息を断っていたので少し欲が出て才覚のある常一さんは開発の時、他の土地と一緒にシカメエの土地も売ってしまったのだ。その金で自分の家近くの土地を広く買ってしまっただ。すべてうまく行ったところへやっかい者が現れたと思っただ常一さんはシゲハルをなだめすかめつ少々金を渡したり、まことしやかな理由をつけたりしたが、シゲハルは引かなかつた。「ジョーオジさんよ。オレを甘く見るなよ。地獄を見てきたオレだ。刑務所もこわくねー。もしもオレん家が持った土地の半分でも返さねーってんだらただじゃおかねえぞ」さら、どーいうことだい。シゲハル、やつばおめえはやくざ者だ。まともな百姓をおどすなんてな「おれは全部調べたのよ。関係したやつらの首をねじ上げてにらみつけたら、てめーがやったとみんな吐いたわ」何

をしょーってんだ。警察を呼ぶぞ」「呼べよ。そのかわりてめーの悪事もさらしな。呼べねーだろう。こんな家の一つや二つ火をつけるのも朝めし前だからなア」「そんなことできるもんならやってみろ」と常一さんもスゴんだ。常一さんのえり首をねじ上げ、「今日のところは帰るがな、てめえんちがどうなつたって知らねーぞ」と言い捨てて帰って行った。それから一ヶ月もした梅の花が咲くころ、夜中に一つ山林をへだてた隣の港屋の木小屋から火の手が上がった。木小屋はほぼ全焼に近かった。母屋に火が移らなかつたのは昔から大事にしていた一本のカシの木があつたからだと言われた。全く火の気のない所から出火したので「不審火」という判断を警察は下した。人間の吐しゃ物があつてそのあたりのワラから燃え始めたらしい。しかし、たしかな証拠はなかつた。「港屋さんちが火事だぞー」と叫びながら走って行く人がいたとか、常一さんとのやり取りを知っている人は「シゲハルにちげーねえ。港屋もえれー目に合つたよナア」と港屋に同情したりしてウワサした。

それから二年ほど経つと常一さんの隣の畑にほつ立て小屋を建て始めたものがいた。シゲハルだった。とうとう常一さんもシゲハルに土地を返したのだった。見よう見まねで細い柱を打ち付けて屋根にはトタンを張ってでき上がった。「そこに住むことになったんで」と十才も歳上のユミという小柄で細い女と一緒にアイサツに来た。港屋が最も恐れていたシゲハルがすぐ近くに定住するというので港屋の空気は暗たんとなった。なんでも屋の港屋へシゲハルもユミもタバコ塩・菓子センベイとよく買いに来た。恐れはあるものの「あんでもよく買いに来るよナア」と港屋も少し警戒をゆるめた。ある時ユミがタバコを買いに来た。帰りぎわに「ここん家はドク売ってねえかい」と言つた。「ドクってあの毒のことかい。何でまた」と言うと「あのヤロー、おッ殺つちやおーと思つてねよ。酒の中へまぜるか、井戸水へでも入れれば殺せるかと思つて」「バカなことは止めなよ」「んだって、ねんがらねんじゅう酒飲んで飲めばオレをぶつぱたくし、どーしよーもねー酒乱だからね」そう言つて帰つた翌日は青アザを作つた顔でタバコをくわえ、ユミはシゲハルの自転車の荷台に乗つて二人はふらふらそこいらに行くのだった。

子供ができて四才になる女の子を連れて来て港屋で買物してもユミはほとんど「コンチクショー」しか言わなかつた。「早く買え、コンチクショー、行くぞコンチクショー」というありさまだった。「オレがタバコ好きでコイツが

腹の中にいる時もよく吸つてたからこいつもタバコ吸うのは上手だよ。一人で石油ストーブの火にタバコつけて吸うからね」と言つてみんなにあきれられた。

ある6月の雨がしとしと降る日、ユミは耕したばかりの足元がとられるでこぼこの畑の中をずぶぬれになって走っていた。「あれ、どーしたんだや」と近所の人が聞くとユミは「子供が流産ねーかと思つて走つてんさ」と答えたといい。

シゲハルたちは十年もしないうちにその土地を売り払つて上尾の上平の方に移つて行った。ユミは死ぬ前に「アチクショーと同じ墓にだけは入りたくねえ」と言つていたのでユミの長女は「お金はかかるけど別々の墓にします」と寺総代の人に言つたという。シゲハルはユミの数年前に亡くなつていた。



池の下

池いけの下した

そこは池の下と言われていた。深い谷地(窪地)で斜めに伸び上がった大木に太いツルがからみ上がり、藤の花房がいくつも垂れ下がる。その下に池があった。池にはフナ、ドジョウ、ハヤ、コイ、ダボハゼ、メダカ、ザリガニ、タニシ、カエル、ウナギ、アメンボ、トンボ、カエル、カワセミ、白サギなど沢山の命であふれていた。その後ろ側は高台の山林が深く切り取られ、切通しのようになっていた。その切通しの人の届かぬ高さに横穴がいくつもあってカワセミが巣を作っていた。その池の下に(一段さらに低い所)「池の下のバア」はたった一人で住んでいた。いろいろとナベカマ位なもので家具らしいものもない八畳一間の板張りのあばら家だった。まるで三ヶ月のようにしゃくれた長くて青い顔で池の下のバアはひざをかかえて座っていることが多かった。目はかすんでよく見えないが恐ろしく耳がよかった。物珍らしさに近くの子供らがひやかしにきて「ひでえオンポロだな」なんて小聲で言っただけでも「このガキメラァ!」と手元の小枝を投げつけられた。子供らが去ればほとんど誰も近づかない閑静な世界。一段高い南の池の魚がハネたり、カワセミが水に飛び込む音を聞きながら全く歯のない口を「なむなむなむ」とくちやくちやさせるばかりだった。

土間の戸を開けた東側へ五六歩も行くと深い泉があった。この村で一番深く一番澄んでいる泉だった。その泉に縄をしばりつけたバケツを投げ込んで飲料水や煮炊きに使っていた。近所の子供らはその深い泉を「出水」と言っていてこわがりながらも長い竹で深さを測ったりしていた。池の下のバアのたんぱく原は上の池のウケ(魚を捕る仕掛け)で捕った小魚類が年に何回かしか生まないチャボの卵くらいだった。米ミソシヨウ油を買う金が困ると近くの港屋(万屋)まで行ってその店の小学生高学年の女の子(麗)ちゃんに手紙を書いてもらおうのだった。東京に出たきりもどって来ない息子に「金を送ってくれ」と催促するのだ。港屋の孫のシー坊をおぶい始めると港屋の女中を含めた女たちは「メシを食って行くつもりだぞ」とジロっと見た。人のいい港屋の愛ばあさんは「何かあった時



磨に引かれて

のためにメシは一人分余計に炊いとくもんだ」と言っていたので池の下のバアは夕飯を食ってから帰ったり、時には泊って行くこともあった。ふとんの中に入って寝る前に二ヶ月のような長い青白い顔を傾けながら手を合わせた。年が一回りした。「なむなむなむ」とくちやくちや言いながら池の下のバアは起き上がって、手さぐりでいろりに火をおこした。一筋の朝日が戸板の間から差し込んで来た。大きな藤の花房が池の水面に映り始めると水の中の空の色も紅を帯び始めた。魚がハネると間髪を容れずカワセミが飛び込む音を聞いた。三回ほどいろいろの灰をかきまわした後、池の下のバアは息を引き取った。池ではもう一度魚のハネる音がした。

磨に引かれて

染磨さんは寝ても覚めても茶碗のことを思っている。昔は絵を描いていたのだが、いつの頃からか、土に魅かれてしまったのだ。自分で作った井戸茶碗や志野を枕元に置いては愛でつすがめつああでもないこうでもないとなでまわしてはため息をついているのだ。

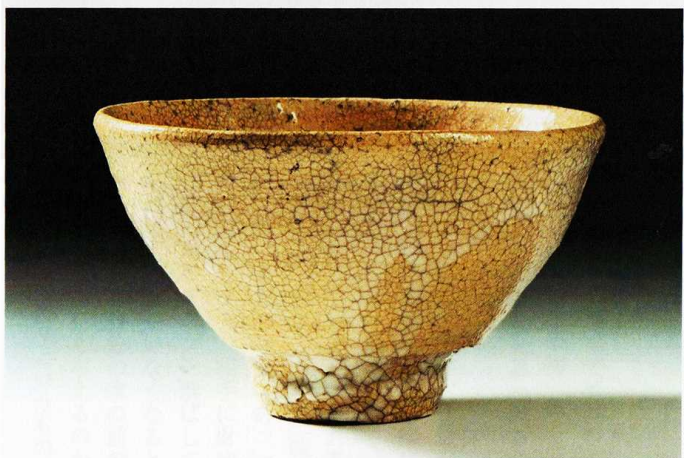
「あなた、私のことや家族のことで悩んだことないでしょ。悩みのタネなら割ってしまうか、いっそのこと土いじりをやめてしまいなさい」と奥さんに言われることもあるが、染磨さんは一向にやめる気配はない。悩みの渦にますます呑み込まれて行く。

「磨がいるところは明るかったのに磨が死んでからなんか陰気くさい顔になっちゃって、あっちが痛いこっちが痛いとか言ってる」と言われる。そうなのだ。犬の「磨」(ゴールデンのオス)がいるころはいつも一緒に散歩に行ったり遊んだり、夕飯後は人間みたいに大きな磨に添い寝して寝かしつけてから作陶室に入るのだ。時には大きな犬小屋の中で一緒に寝てしまうことがある。染磨さんは自分の名の一部を犬の名前にした。

地元のまだそれほど名の通っていない田舎のギャラリーで最近個展(作陶展)をやったので、ちょっとほっとしたのだった。染磨さんはみんなにやめろやめろ恥をかくぞとさんざんに言われても「恥を覚悟した。だから笑うかも知れないけど自分の作品には自分で判断した値段をつけさせてくれ」と言ってるギャラリーのオーナーをも押し井戸や志野の抹茶碗に2万3万5万という値段を付けた。義理で買う知人でもいてくれればいいとオーナーも思った。十ヶ二十ヶと売れた。義理もあつたらう、しかし2回3回と見に来て買ってくれた初めての人の、通りすがりに看板を見て急に買う気になった人もいた。染磨さんは(銀座では)東京では個展をやらなかった。でも不安でいっぱいだった。田舎でとんでもない値を付けて大恥さらすのかと。染磨さんはひそかに無関係の人が買ってくれたことに自負を感じていた。

月日が経って「最近やる気になってるみたいね」と奥さんから優しい声がかかった。どうしたことか染磨さんリビングに青のビニールシートを敷いてそのドまん中でろくろをひきはじめたのだ。岩槻で長い間、人形師(雛人形作り)をやっていた奥さんの父親が台所のマネ板に手を置いたまま振り返ってじろつと覗いた。愛娘のみづきちゃんが心配そうに染磨さんの足元にきた。奥さんが何か察したらしく「だいじょうぶ」と言った。「ああ」と答えた。そして「磨がオレの手に乗り憑つて土を引いている」と染磨さんは言った。——染磨さんは上手でも下手でもない、天と地に任せただ一点で今無心に一体となって作るでもなく作っているということも言いたかったようだった。

ろくろをひいた後、疲れて、もぬけの空になって久しい大型の犬小屋の前に寝そべった。五月の空が見えた。「せがれかい」と少し遠くの年寄りに聞かれた。「ああ、うちのてごっぱたきだよ。くろ(田の畦) 付ぐれーはさせねーとねえー」と染磨さんの父は言った。「てごっぱたき」とは「物を入れてかつぐもっこ」の中の最後のみみ(米つぶ) がらをたたく「一番最後のこれで打ち止めという子供のことだった。染磨さんはそのくろ付けの時の手の指の間から足の指の間からぬるした泥がわき出る感触と田んぼの黒土の匂いと、まるでぴかぴか光るようかん(羊羹)のような塗り終ったばかりの畦塗りのくろを思い出していた。



染磨茶碗



八面六臂礼仙登場

八面六臂礼仙登場

礼仙はいつも走りまわっている。止まると死んでしまうマゲロミみたいなのだ。もんべスタイルでゲゲゲのキタローみたいなゲタをはいてカタカタと走ってきたかと思うともう去って行く。帰った後にはパン、果物、魚、野菜、タマゴ、お菓子、ありとあらゆるものがその度に置いてあって「どーぞ」というわけである。お札を言われる前に逃げるように帰ってしまうのだ。おしきせの札を言われたくないのだから。

礼仙の夫はベクトリニックの獣医さんなのでその手伝いをするのが仕事だ。若い助手はいるのだが、礼仙がいないと夫は機嫌が悪いのだ。礼仙は先を読んで次から次へと準備してポイントをよく知っているから手術の時は礼仙を手元に置いておきたいのだ。手術から離れると礼仙は草加でも寄居でも水上でも車でブンブン飛んで歩く。野菜作り、収穫草取り、パンパン沢山の買物をして余った物を知り合いに惜しげもなくどんどんくれ歩く。くれる方が多いのだ。礼仙の趣味はとどまることを知らない。古布を使った洋服作り、つるし雛、小物、木工、陶芸、三味線、胡弓、ギター、ビーズ、漆宝、お茶etc——最初笑われるようなものを作るが、めげない、そして時々「あッ」と思うようなレベルのものまで作ってしまう。礼仙を憎んでいた縁者のめんどりも最後は見えてしまう。相手に財産があってもお金はもらわない。「ただ見ていられないから」と百kの道のりも物ともせず、車をブンブン飛ばして行く。声が高くて少しうるさい時もあるが、気がよくなる気が配りができて欲のない盛り上げ屋、礼仙がいなくなるとまるで暑い夏が去ったように急になつてしまふのだ。——礼仙の父は彼女が子供の頃、自分の家の前の公道の工事関係者にわざわざもちをつけてふるまったのだ。工事の男たちはなんで自分たちがもちをもらえるのか目を丸くするばかり、「まあいいから食え食え」と言って笑っていたという。その父にしてこの子ありというものだ。さてそろそろどこからか風のようにやってきて走りぬけるゲタの音が聞こえてきそう。